

中国社会文化学会・例会のお知らせ
(2018年度・第1回)

ミニ・シンポジウム

「漢字圏の教養教育：明治日本の“普通教育”から21世紀の古典教育へ」

日時：2018年6月2日（土）午後2時から5時

場所：東京大学駒場キャンパス 18号館 4階 コラボレーションルーム 1

報告者及論題：

潘世聖（華東師範大学外国語学部教授、国際日本文化研究センター外国人研究員）

「弘文学院留学期の魯迅における日本受容——新発見の『宏文学院講義録』をめぐって」

韓睿媛（ハン・エイウォン、朝鮮大学校人文科学大学漢文学科教授）

「東アジアの地平から見た古典教育としての経学」

司会：伊東貴之（国際日本文化研究センター教授）

言語：日本語

共催：東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）

資料代として500円を当日受付にて頂戴します。

報告概要

1 潘世聖「弘文学院留学期の魯迅における日本受容——新発見の『宏文学院講義録』をめぐって」

魯迅研究の日本留学期（1902～1909）には比較的多くの不明点が残されている。なかでも最初の弘文学院留学期（1902～1904）については、関連史料が欠如しており不明な点が多い。この時期に関する研究として、細野浩二「境界の上の魯迅—日本留学の軌跡を追って」（東京：『朝日アジアレビュー』1976年第4号）は早い時期の成果として注目に値する。次いで1987年7月～1990年10月にかけて『中国文芸研究会会報』に連載された「留学期魯迅関連資料」をまとめた北岡正子『魯迅 日本という異文化のなかで』（関西大学出版部、2001）は、日本に残存する明治期の関連資料を発掘し、当時魯迅のおかれた留学環境を再現し、魯迅の弘文学院留学期研究にとって、必読の参考文献とな

っている。最近の研究によって、魯迅の日本留学期間中、いわゆる「原魯迅」（片山智行）の形成に対して、「弘文学院期」がきわめて重要な意味を持っていたことが明確になってきた。弘文学院の教育方針、とりわけ学院長嘉納治五郎の考え方、すなわち「普通教育」と人間の基本形成に関する観念が、「原魯迅」の形成に大きく関わっていたのである。

本報告では、報告者が偶然入手した『宏文学院講義録』三巻 16 科目は、魯迅の弘文学院在学時の教科書として、現存する唯一の完全な教科書だといえるものである。本報告ではこの資料に関して整理紹介を行いながら、来日一、二年目の魯迅が受けた学校教育の内容の全体像を初めて明らかにすること、すなわち当時の魯迅が置かれた最も身近な知的言説環境の様相を検証することを通して、留学生魯迅の思想形成における最大のポイント＝日本受容をより具体的、的確に解明し、「原魯迅」の諸要素を探っていく。

2 韓睿姫「東アジアの地平から見た古典教育としての経学」

ポスト・ヒューマン(Post-Human)の 21 世紀の今日において、なぜ古典教育が必要となるのか。21 世紀こそは人文学的な考察が必要な時期である。古典に見られる人文学的な洞察、転換期によみかえられた人文学的な代案を示す必要性がある。人間は未来に生きたことはないが、蓄積された過去の智慧を顧みながら、未来を推測し予見することができる。過去にもどってどのように生きるべきかを点検する際、古典は我らに新しい生き方のモデルが成立する根拠をもたらす。これらは東洋における枢軸の時代の精神的、文化的な産物である古典に注目する理由である。

現在の漢文文化圏において、漢文文明の形成期の古典のうち、特に儒家古典を「経典」とも称している。東アジアの古典教育を考える際、伝統時代における東アジア世界の学の伝統と知の形態を考察して、そのドグマを整理する必要性がある。そのためには、まず東アジアの伝統時代の儒教教育の教育体系論(教育-教化)と、学習の段階論を再構成して、東アジア的な価値を再評価し再解釈するきっかけにする。それが、東アジアの伝統教育の価値と可能性を再発見することに繋がると考える。それとともに、中国で発生した「読経論争」(儒教経典の価値を巡っての論争)に注目する必要がある。中国の読経運動は、伝統回復という試みの裏面に、中華主義と中華主義の根本にある儒教伝統を回復して社会主義に代える代案の政治イデオロギーを造ろうとする意図が潜んでいる。我らの古典教育は、21 世紀の東北アジアの未来を引き行く思想と価値についての探究を主題にするべきであろう。「伝統」に基づいて未来を推論する際の危険性を喚起しながら、東アジアの文明史の脈絡で、古典教育を考えていく。